



大坂夏の陣図屏風(右隻)の部分 左に大坂城、右に四天王寺石の鳥居、その前には真田隊が描かれている(大阪城天守閣蔵)

大坂の合戦譚二つ

信長と家康と

青木 晃

織田信長は、かくの如く望んだ——
サテ、アノ石山本願寺ノ地形コソ、古今希ナル城地ナリ。彼ノ処ニ城ヲキツキ、西国ノラサヘニスルナ
ラバ、又モ無ヒ究竟ノ（好都合な）場処ナラン。イカサマ寺地ニシテオクハ、残り多ヒ（残念な）コトナリ。
急ぎ使者ヲ指向ケ、寺地ヲ此ノ方ヘ受取り城地ニセン。

摂州東成郡生玉庄大坂という在所に、西国布教のため一字の坊舎を建てたのは、蓮如上人であった。明応五（一四九六）年のことという。この地大坂は、東に淀の川筋で京の都とながり、西は瀬戸内の海にひらけ、南には
商工業の先進都市堺に近いという要地であった。一坊舎は石山本願寺へと発展し、信者たち（門徒）はこの本願
寺を中心に寺内町を形成していった。寺内町には多くの商工業者が集まり、富とともにある種の治外法権をもつ
て、戦国争乱の中を力強く生きはじめたのである。石山の寺内町は方八丁に及び、北町・南町・新屋敷など六つ
の区画を有して、要害の如くであったという。

信長は、天下制覇の上からも、この地がほしかった。西国を見渡すに、安藝の毛利・出雲の尼子・四国に河野・
九州に菊池、それに赤松・山名など大名共が虎視眈々（ウノメタカノメ）と天下を窺っており、その威圧防備の
ためにも最適の所と考えたのである。

頃ハ元亀元（一五七〇）年八月下旬ノコト有シガ、仏法ノ大怨敵タル織田弾正下總助信長、京都ヨリ石山
目当ニ討テ出カケル。大將其ノ日ノ出立ニハ、実ニ放逸邪見ノ眼ライカラシ、赤面宇顔ト顔モアカラム赤地ノ
錦ノ直衣ニ……云々

この時から実に十一年に及ぶ信長の石山攻めがあり、城方には頭如上人を中心に下間一族や雑賀の鈴木孫市ら
の活躍があつて奮戦、また足利将軍義昭はじめ西国大名の誰彼と巧みに気脈を通じて信長の意のままを許さず、
遂に天正八（一五八〇）年和議によって紀州鷲の森へ上ら退去するに至る経緯を叙する合戦譚が存する。

太閤の大坂城は、慶長十九（一六一四）年冬十月から、徳川勢により包囲攻撃された。城の主は秀吉の遺子秀
頼である。石山本願寺の焼土の上に聳え立つこの名城は、圧倒的な軍勢の攻撃にもよく耐えるかにみえ、その中
で真田左衛門佐や後藤・木村らの奮戦もあったのだが、中津川を堰き止めての水攻めや天王寺方面からの大砲攻
め・坑道掘つての火薬攻め（の噂）に恐れ怖じた淀殿ら女房の意向も強く、歳暮に和議となった。城下大坂の町
は、豊臣方の自決によって焼かれ、又城の外堀は徳川方の手で埋められてしまった。

翌慶長二十年夏四月、徳川軍の再征に、豊臣方は城外へ出て戦わざるをえず、各地に惨敗して、五月に落城
（秀頼ら自刃）となった経緯は夙によく知られているよう。

この大坂の陣の合戦譚には、冬の陣の直後にこの合戦のみを描く『大坂物語』一冊本と、冬夏両陣を合わせ描
く『大坂物語』上下二冊本とがあるのである。

合戦譚には、戦後勝者の側に立つて軍功等を叙するもの他に、敗者の側の奮戦と討死の哀しい物語もあつて、
注目すべきである。哀話を物語ることは、死者の鎮魂でもあったのだらう。

石山合戦には本願寺側の『石山退去録』があり、大坂の陣には豊臣方に立つ天理写本『大坂物語』や『山口休
庵咄』などがある。蓮如寺内町は信長に焼かれ、太閤城下町は家康に破壊されて、そこに再び近世商都大坂が成っ
て行ったのである。時を経て、講釈本の如き『石山軍鑑』や『難波戦記』等が、町の人々に提供されて面白がら
れる。

☆「大坂」として当時の表記を用いた。☆☆冒頭引用は『石山退去録』（寛谷大本）より。

（文学部教授）



先進国首脳会
議（サミット）
に先立ち、参加
七カ国の労働組
合代表が集まっ
て、いわゆる労
働サミットが開
かれた。従来か
ら対日貿易不均
衡の問題に関し
ては、政府、産業界以上に強い
態度を表明してきた各国労働界
の代表者達だけに、案の定、日
本に対し厳しい注文、不満が出
された。新聞報道によれば各代
表が共通して問題にしているの
は、欧米諸国に比して二、三割
多い労働時間と企業内組合のあ
り方である。その批判には、会
社を連帯共同体とみなし「働き
すぎ」もいとわぬ日本の労働
者の生き方も対象として含まれ
ているように思われる。そのよ
うにして体質を強めた企業と同
じ土俵で競争することを公平で
ないと考えているようだ。欧米
人にとって大事なのは、自分自
身を含めた家族、そして友人で
ある。ワークホリック（仕事
中毒）を自認するあるアメリカ
の経営者は、かつて「週末は家
族のために空けておき、仕事は
一切しない」と語った。欧米人
は家族と共に過ごす時間を確保
するために、あえて職場や職業
を変え、あえて辞さない。他
方、仕事のために家族と離れて
暮らすことも辞さないのが日本人
である。所属する組織を大家族
的な共同体、いわば擬制的な家
族とみなし、そこに自己の存在
の全てをかける日本に対し、本
来の家族を大事にする心性の違
いが現われているように思え
る。家族と食事を共にすることが
大前提としてあり、レジャー
も家族が単位となる。日本人は
明治以来、ひたすら走りつづけ
てきた。家族は燃つてそれにつ
いてくることが要求された。
我々も家族と共にゆくりと歩
きながら、生きる喜びを分かち
合う生き方を、そろそろ身につ
けても良い時にきているのでは
なかつたか。

昭和61年度 収支予算書

基本金組入額合計	△ 3,636,106,000	△ 4,414,794,000	778,688,000
基本金	△ 2,605,921,000	△ 4,180,592,000	1,574,671,000
特定基本金	△ 1,030,185,000	△ 234,202,000	△ 795,983,000
消費収入の部合計	17,360,515,000	15,483,000,000	1,877,515,000
消費支出の部			
科 目	61年度予算	60年度予算	増 減
人件費	13,691,838,000	11,555,623,000	2,136,215,000
教員人件費	7,512,725,000	7,252,679,000	260,046,000
職員人件費	4,113,509,000	3,946,367,000	167,142,000
役員報酬	54,756,000	43,332,000	11,424,000
退職職	336,239,000	1,080,000	335,159,000
退職給与引当金繰入額	1,674,609,000	312,165,000	1,362,444,000
教育研究経費	4,918,645,000	4,800,218,000	118,427,000
旅費交通費	319,836,000	307,589,000	12,247,000
消耗品費	901,579,000	903,050,000	△ 1,471,000
印刷製本費	280,168,000	229,602,000	50,566,000
研究費	10,000,000	10,000,000	0
通信運搬費	98,629,000	109,196,000	△ 10,567,000
光熱水費	419,285,000	359,906,000	59,379,000
補助費	168,379,000	148,327,000	20,052,000
広告費	5,600,000	2,692,000	2,908,000
減価償却額	1,079,761,000	950,447,000	129,314,000
修繕費	487,220,000	767,940,000	△ 280,720,000
除却費	1,480,000	46,198,000	△ 44,718,000
保険料	37,576,000	13,545,000	24,031,000
業務委託費	549,239,000	488,281,000	60,958,000
賃借料	365,311,000	296,772,000	68,539,000
租税公課	462,000	459,000	3,000
贈金	3,385,000	3,282,000	113,000
支払手数料・報酬	100,312,000	87,742,000	12,570,000
渉外費	10,965,000	8,510,000	2,455,000
会議・会合費	31,397,000	29,348,000	2,049,000
雑費	48,051,000	37,332,000	10,719,000
管理経費	1,044,488,000	962,164,000	82,324,000
旅費交通費	62,069,000	48,200,000	13,869,000
福利厚生費	25,286,000	22,688,000	2,598,000
年金	55,168,000	59,381,000	△ 4,213,000
消耗品費	77,741,000	59,018,000	18,723,000
印刷製本費	104,350,000	67,411,000	36,939,000
通信運搬費	32,109,000	35,452,000	△ 3,343,000
光熱水費	34,262,000	40,189,000	△ 5,927,000
補助費	560,000	10,480,000	△ 9,920,000
広告費	72,686,000	69,120,000	3,566,000
減価償却額	62,279,000	55,532,000	6,747,000
修繕費	48,721,000	67,387,000	△ 18,666,000
除却費	5,000,000	0	5,000,000
保険料	400,000	400,000	0
業務委託費	1,379,000	1,570,000	△ 191,000
賃借料	287,039,000	279,038,000	8,001,000
賃借料	16,397,000	9,225,000	7,172,000
租税公課	11,888,000	14,958,000	△ 3,070,000
贈金	6,823,000	506,000	6,317,000
支払手数料・報酬	54,939,000	56,372,000	△ 1,433,000
渉外費	14,995,000	8,510,000	6,485,000
会議・会合費	31,454,000	30,000,000	1,454,000
雑費	38,417,000	14,920,000	23,497,000
借入金等利息	665,288,000	590,768,000	74,520,000
借入金利息	665,288,000	590,768,000	74,520,000
資産処分差額	13,007,000	59,907,000	△ 46,900,000
建物処分差額	0	5,662,000	△ 5,662,000
教育研究用機器備品処分差額	10,555,000	51,513,000	△ 40,918,000
その他の機器備品処分差額	412,000	406,000	6,000
図書処分差額	2,000,000	1,000,000	1,000,000
車輛処分差額	0	1,326,000	△ 1,326,000
【予備費】	70,000,000	70,000,000	0
消費支出の部合計	20,403,266,000	18,038,680,000	2,364,586,000
当年度消費支出超過額	3,042,751,000	2,555,680,000	487,071,000
前年度繰越消費支出超過額	4,167,917,000	1,612,237,000	2,555,680,000
翌年度繰越消費支出超過額	7,210,668,000	4,167,917,000	3,042,751,000

その他の支出	1,816,885,000	1,418,103,000	398,782,000
貸付金支払支出	468,885,000	434,540,000	34,345,000
前期末未払金支払支出	800,000,000	528,499,000	271,501,000
修学旅行費預り金支払支出	40,000,000	40,000,000	0
その他の預り金支払支出	231,000,000	198,064,000	92,936,000
前払金支払支出	165,000,000	165,000,000	0
その他の支出	52,000,000	52,000,000	0
【予備費】	100,000,000	100,000,000	0
資金支出調整勘定	△ 1,955,000,000	△ 958,508,000	△ 1,006,492,000
期末未払金	△ 1,800,000,000	△ 800,000,000	△ 1,000,000,000
前期末前払金	△ 165,000,000	△ 158,508,000	△ 6,492,000
次年度繰越支払資金	4,085,375,000	5,082,802,000	△ 997,427,000
支出の部合計	32,579,263,000	30,476,288,000	2,102,975,000

消費収支予算書

昭和61年4月1日から
昭和62年3月31日まで

(単位 円)

消費収入の部			
科 目	61年度予算	60年度予算	増 減
学生生徒等納付金	13,318,257,000	12,972,041,000	346,216,000
授業料	8,987,661,000	8,722,993,000	264,668,000
入学料	2,099,110,000	2,140,555,000	△ 41,445,000
実験・実習料	363,712,000	333,457,000	30,255,000
維持拡充資金	1,867,774,000	1,775,036,000	92,738,000
手数料	1,787,906,000	1,717,080,000	70,826,000
入学検定料	1,753,845,000	1,689,601,000	64,244,000
試験料	1,806,000	1,770,000	36,000
証明手数料	27,983,000	21,228,000	6,755,000
その他の手数料	4,272,000	4,481,000	△ 209,000
寄付金	1,282,150,000	690,000,000	592,150,000
特別寄付金	1,267,150,000	675,000,000	592,150,000
現物寄付金	15,000,000	15,000,000	0
補助金	2,641,663,000	2,748,803,000	△ 107,140,000
国庫補助金	2,302,830,000	2,409,450,000	△ 106,620,000
地方公共団体補助金	333,533,000	336,053,000	△ 2,520,000
学術研究振興資金	5,300,000	3,300,000	2,000,000
資産運用収入	1,443,400,000	1,465,050,000	△ 21,650,000
年金基金引当特定資産運用収入	21,000,000	22,000,000	△ 1,000,000
拡充基金引当特定資産運用収入	229,000,000	233,000,000	△ 4,000,000
教育振興基金引当特定資産運用収入	37,000,000	35,000,000	2,000,000
奨学基金引当特定資産運用収入	1,400,000	1,290,000	110,000
国際交流基金引当特定資産運用収入	11,000,000	0	11,000,000
学術研究助成基金引当特定資産運用収入	5,500,000	0	5,500,000
教育助成基金引当特定資産運用収入	5,500,000	0	5,500,000
退職給与引当金引当特定資産運用収入	201,000,000	215,000,000	△ 14,000,000
減価償却引当金引当特定資産運用収入	39,000,000	42,000,000	△ 3,000,000
校地拡充資金引当特定資産運用収入	385,000,000	382,000,000	3,000,000
厚生施設建設資金引当特定資産運用収入	21,000,000	22,000,000	△ 1,000,000
施設整備拡充資金引当特定資産運用収入	42,000,000	30,000,000	12,000,000
第3学舎増築資金引当特定資産運用収入	0	60,000,000	△ 60,000,000
創立100周年記念事業資金引当特定資産運用収入	83,000,000	51,000,000	32,000,000
受取利息・配当金	317,000,000	329,400,000	△ 12,400,000
施設設備利用料	45,000,000	42,360,000	2,640,000
資産売却差額	20,000,000	20,000,000	0
有価証券売却差額	20,000,000	20,000,000	0
事業収入	114,716,000	106,946,000	7,770,000
補助活動収入	94,208,000	87,764,000	6,444,000
付属事業収入	20,508,000	19,182,000	1,326,000
雑収入	388,529,000	177,874,000	210,655,000
私学退職金財団交付金	310,111,000	111,873,000	198,238,000
雑収入	78,418,000	66,001,000	12,417,000
借入金等収入	2,950,000,000	1,816,300,000	1,133,700,000
長期借入金収入	1,300,000,000	700,000,000	600,000,000
短期借入金収入	1,500,000,000	1,000,000,000	500,000,000
学学校債収入	150,000,000	116,300,000	33,700,000
前受金収入	3,543,585,000	3,538,335,000	5,250,000
授業料前受金収入	1,145,140,000	1,141,340,000	3,800,000
入学金前受金収入	2,097,500,000	2,097,500,000	0
実験・実習料前受金収入	50,690,000	50,140,000	550,000
維持拡充資金前受金収入	250,255,000	249,355,000	900,000
その他の収入	2,984,196,000	1,928,927,000	1,055,269,000
校地拡充資金引当特定資産からの繰入収入	2,000,000,000	0	2,000,000,000
第3学舎増築資金引当特定資産からの繰入収入	0	800,000,000	△ 800,000,000
創立100周年記念事業資金引当特定資産からの繰入収入	80,000,000	0	80,000,000
修学旅行費預り資産からの繰入収入	40,000,000	40,000,000	0
貸付金回収収入	156,601,000	136,425,000	20,176,000
前期末未収入金収入	348,355,000	639,540,000	△ 291,185,000
修学旅行費預り金収入	40,000,000	40,000,000	0
その他の預り金収入	250,000,000	246,000,000	4,000,000
その他の収入	69,240,000	26,962,000	42,278,000
資金収入調整勘定	△ 4,162,794,000	△ 3,837,794,000	△ 325,000,000
期末未収入金	△ 619,606,000	△ 348,355,000	△ 271,251,000
前期末前受金	△ 3,538,939,000	△ 3,486,939,000	△ 51,999,000
期末受取手形	△ 5,000,000	△ 2,500,000	△ 2,500,000
前年度繰越支払資金	5,082,802,000	5,945,026,000	△ 862,224,000
収入の部合計	32,579,263,000	30,476,288,000	2,102,975,000

資金収支予算書

昭和61年4月1日から
昭和62年3月31日まで

(単位 円)

収入の部		61年度予算	60年度予算	増 減
科 目				
学生生徒等納付金収入		13,318,257,000	12,972,041,000	346,216,000
授 業 料 収 入		8,987,661,000	8,722,993,000	264,668,000
入 学 金 収 入		2,099,110,000	2,140,555,000	△ 41,445,000
実 験 ・ 実 習 料 収 入		363,712,000	333,457,000	30,255,000
維持拡充資金収入		1,867,774,000	1,775,036,000	92,738,000
手 数 料 収 入		1,787,906,000	1,717,080,000	70,826,000
入 学 検 定 料 収 入		1,753,845,000	1,689,601,000	64,244,000
試 験 料 収 入		1,806,000	1,770,000	36,000
証 明 手 数 料 収 入		27,983,000	21,228,000	6,755,000
そ の 他 の 手 数 料 収 入		4,272,000	4,481,000	△ 209,000
寄 付 金 収 入		1,267,150,000	675,000,000	592,150,000
特 別 寄 付 金 収 入		1,267,150,000	675,000,000	592,150,000
補 助 金 収 入		2,641,663,000	2,748,803,000	△ 107,140,000
国 庫 補 助 金 収 入		2,302,830,000	2,409,450,000	△ 106,620,000
地 方 公 共 団 体 補 助 金 収 入		333,533,000	336,053,000	△ 2,520,000
学 術 研 究 振 興 資 金 収 入		5,300,000	3,300,000	2,000,000
資 産 運 用 収 入		1,443,400,000	1,465,050,000	△ 21,650,000
年 金 基 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		21,000,000	22,000,000	△ 1,000,000
拡 充 基 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		229,000,000	233,000,000	△ 4,000,000
教 育 振 興 基 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		37,000,000	35,000,000	2,000,000
奨 学 基 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		1,400,000	1,290,000	110,000
国 際 交 流 基 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		11,000,000	0	11,000,000
学 術 研 究 助 成 基 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		5,500,000	0	5,500,000
教 育 助 成 基 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		5,500,000	0	5,500,000
退 職 給 与 引 当 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		201,000,000	215,000,000	△ 14,000,000
減 価 償 却 引 当 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		39,000,000	42,000,000	△ 3,000,000
校 地 拡 充 資 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		385,000,000	382,000,000	3,000,000
厚 生 施 設 建 設 資 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		21,000,000	22,000,000	△ 1,000,000
施 設 整 備 拡 充 資 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		42,000,000	30,000,000	12,000,000
第 3 学 舎 増 築 資 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		0	60,000,000	△ 60,000,000
創 立 1 0 0 周 年 記 念 事 業 資 金 引 当 特 定 資 産 運 用 収 入		83,000,000	51,000,000	32,000,000
受 取 利 息 ・ 配 当 金 収 入		317,000,000	329,400,000	△ 12,400,000
施 設 設 備 利 用 料 収 入		45,000,000	42,360,000	2,640,000
資 産 売 却 収 入		1,220,000,000	1,222,700,000	△ 2,700,000
車 輛 売 却 収 入		0	2,700,000	△ 2,700,000
有 価 証 券 売 却 収 入		1,220,000,000	1,220,000,000	0
事 業 収 入		114,716,000	106,946,000	7,770,000
補 助 活 動 収 入		94,208,000	87,764,000	6,444,000
付 属 事 業 収 入		20,508,000	19,182,000	1,326,000
雑 収 入		388,529,000	177,874,000	210,655,000
私 学 退 職 金 財 団 交 付 金 収 入		310,111,000	111,873,000	198,238,000
雑 収 入		78,418,000	66,001,000	12,417,000
借 入 金 等 収 入		2,950,000,000	1,816,300,000	1,133,700,000
長 期 借 入 金 収 入		1,300,000,000	700,000,000	600,000,000
短 期 借 入 金 収 入		1,500,000,000	1,000,000,000	500,000,000
学 校 債 収 入		150,000,000	116,300,000	33,700,000
前 受 金 収 入		3,543,585,000	3,538,335,000	5,250,000
授 業 料 前 受 金 収 入		1,145,140,000	1,141,340,000	3,800,000
入 学 金 前 受 金 収 入		2,097,500,000	2,097,500,000	0
実 験 ・ 実 習 料 前 受 金 収 入		50,690,000	50,140,000	550,000
維持拡充資金前受金収入		250,255,000	249,355,000	900,000
そ の 他 の 収 入		2,984,196,000	1,928,927,000	1,055,269,000
校 地 拡 充 資 金 引 当 特 定 資 産 からの 繰 入 収 入		2,000,000,000	0	2,000,000,000
第 3 学 舎 増 築 資 金 引 当 特 定 資 産 からの 繰 入 収 入		0	800,000,000	△ 800,000,000
創 立 1 0 0 周 年 記 念 事 業 資 金 引 当 特 定 資 産 からの 繰 入 収 入		80,000,000	0	80,000,000
学 生 旅 行 費 預 り 資 産 からの 繰 入 収 入		40,000,000	40,000,000	0
貸 付 金 回 収 収 入		156,601,000	135,425,000	20,176,000
前 期 未 収 入 金 収 入		348,355,000	639,540,000	△ 291,185,000
学 生 旅 行 費 預 り 金 収 入		40,000,000	40,000,000	0
そ の 他 の 預 り 金 収 入		250,000,000	246,000,000	4,000,000
そ の 他 の 収 入		69,240,000	28,962,000	42,278,000
資 金 収 入 調 整 勘 定		△ 4,162,941,000	△ 3,837,794,000	△ 325,147,000
期 末 未 収 入 金		△ 619,006,000	△ 348,355,000	△ 271,251,000
前 期 未 収 前 受 金		△ 3,538,335,000	△ 3,486,939,000	△ 51,396,000
期 末 受 入 取 手 形		△ 5,000,000	△ 2,500,000	△ 2,500,000
前 年 度 繰 越 支 払 資 金		5,082,802,000	5,945,026,000	△ 862,224,000
収 入 の 部 合 計		32,579,263,000	30,476,288,000	2,102,975,000

昭和60年度

区 分 模	業 種	業 種 別										公 務	計
		農林・水産・鉱業	建設業	製造業	商業	金融・保険業	不動産業	運輸・通信業	電気ガス・水道業	教育・サービス業	放遊・広告業		
全 学 校	巨大	—	2	52	563	160	192	—	65	3	27	—	1,064
	大	—	2	52	563	339	191	6	28	—	183	1,402	
	中	—	38	234	225	44	17	12	—	233	803		
	小	1	14	64	86	4	12	8	—	167	356		
	計	3	176	1,444	810	431	35	113	3	649	211	3,875	
文 科 系 学 校	構成比率	0.1	4.5	37.3	20.9	11.1	0.9	2.9	0.1	16.8	5.4	100.0	
	巨大	2	31	287	156	189	—	55	2	26	—	748	
	大	—	20	319	320	190	5	27	—	147	—	1,028	
	中	—	9	162	210	44	14	11	—	187	—	637	
	小	1	4	50	85	4	9	8	—	131	—	292	
工 学 部	計	3	64	818	771	427	28	101	2	522	178	2,914	
	構成比率	0.1	2.2	28.1	26.4	14.6	1.0	3.5	0.1	17.9	6.1	100.0	
	巨大	—	21	276	4	3	—	10	1	1	—	316	
	大	—	52	264	19	1	1	1	—	36	—	374	
	中	—	29	72	15	—	3	1	—	46	—	166	
女 子 学 校	小	—	10	14	1	—	3	—	—	36	—	64	
	計	—	112	606	39	4	7	12	1	127	33	961	
	構成比率	—	11.7	65.2	4.0	0.4	0.7	1.3	0.1	13.2	3.4	100.0	
	巨大	—	8	44	34	31	—	8	1	1	—	127	
	大	—	1	20	47	34	—	1	—	38	—	141	
子 校	中	—	20	23	8	6	3	—	—	41	—	101	
	小	—	6	17	—	4	3	—	—	45	—	75	
	計	—	9	90	121	73	10	15	1	135	14	468	
	構成比率	—	1.9	19.2	25.9	15.6	2.1	3.2	0.2	28.9	3.0	100.0	

注: ※は公立学校教員の数を示す



最近、新たな雑誌の時代を迎えて、情勢の急激な変化と読者の多様化に対応するために、種々様々な雑誌の創刊やイメージ・チェンジが盛んに行われている。今後、雑誌が果たしてどのような役割を果していただけるのか、読者のニーズに応えようとするのか、いかなる方向をめざそうとしているのか、にわかに定めた状況にあるといつてよさそうである。それ自体、実に興味深い問題ではあるが、ここでは、日本における雑誌の歴史を概観しながら、「雑誌」というものをもう一度、考え直してみよう。

いま、新たな雑誌の時代

昭和八年まで、明治初期屈指の雑誌として、当時の知識層に大きな影響を与えた。その後、大正・昭和と二つの世界大戦をはさんで、時代は大きく変遷を遂げ、数多くの評論雑誌、文芸雑誌、総合雑誌が生み出されていくことになる。

雑誌は、マガジンがもととなり「貯蔵所」、「倉庫」を意味する言葉であったことから分かるように、単に世の中の出来事を報道するばかりではなく、学問上の新しい発見や意見を整理し、保存する機能をもちあわせている。意見の伝達を主とする評論雑誌、総合雑誌のおもなものは、先にあげた「明六雑誌」の他、徳富蘇峰らによる「国民之友」、志賀重昂、三宅雪嶺ら政教社グループの「日本人」(のち、「日本及日本人」と改題)、「太陽」、「中央公論」、大正期に入るとは「改造」、「文藝春秋」など、新雑誌が一堂に集められ、自

「中央公論」、「文藝春秋」は以来数十年にわたって長寿を保ち、総合雑誌が必ずしも安泰ではない。今の読書界においても、根強いファンを持つていっているといわれる。翻って、本学の総合図書館には、約七、〇〇〇タイトルに及ぶ和洋の学術雑誌、総合雑誌、文芸雑誌、各種専門誌が揃えられ、学生諸君の活用を待っている。これ程多くの新雑誌が一堂に集められ、自

には注意を向けてみてはどうか。意外な雑誌から好奇心が触発され、新しい知識の世界が展開されていくかも知れない。特に自然科学の分野では、専門誌及びそれに類する情報誌をいち早く目にすることが、学問の最新動向を理解するための不可欠な条件といつてよさう。

これら新雑誌は、通常その年を過ぎると、合製製本し、地下の書庫に保存、必要に応じて閲覧に供される。――雑誌は資料の宝庫だ。新聞にくらべ、事件、時代の背景が分量的にもたくさん盛り込まれ、視点が広がっている。――雑誌図書館の異名をもつ、大宅文庫の創始者、大宅壮一氏の言葉をまづてもなく、雑誌はその表紙から、記事から、物によって広告に至るまで、それぞれの時代をうつす第一級の資料である。

幸い、本学の総合図書館は、これら個人誌など一般の店頭には並ばないものも含まれている。また、昨今の企業PR誌は、日本アイ・ビー・エムの「無限大」にみられるように、内容、体裁とも次第に洗練の度を加えており、著名なライターのエッセー、評論などを載した文化誌的な色彩をもつものが多い。とりわけ、岩波書店の「図書」、有斐閣の「書斎の窓」など出版のPR誌には、最新の出版情報をもとに、関連の記事が豊富に盛り込まれていて興味深い。学習に直接関係ある雑誌の利用は、うまぬがな、一見何のかわからないものも、移りゆく学生生活を送るに役立つものだ。

由に閲覧できる大学図書館は、他に例を見ない。中には団体・協会誌、個人誌など一般の店頭には並ばないものも含まれている。また、昨今の企業PR誌は、日本アイ・ビー・エムの「無限大」にみられるように、内容、体裁とも次第に洗練の度を加えており、著名なライターのエッセー、評論などを載した文化誌的な色彩をもつものが多い。とりわけ、岩波書店の「図書」、有斐閣の「書斎の窓」など出版のPR誌には、最新の出版情報をもとに、関連の記事が豊富に盛り込まれていて興味深い。学習に直接関係ある雑誌の利用は、うまぬがな、一見何のかわからないものも、移りゆく学生生活を送るに役立つものだ。

現代および近未来の若者に向かって、スポーツの意義を強調する書である。文明の加速度的な進歩と反比例して、身体が虚弱化が一般化しつつある傾向に、二人の著者は心底から憂いをこめて、対策の必要を多面的に語りかけている。晩年の大島謙吉は「心のウツク心配」の根源として、「小・中・高の子どものために、何と、早期老化現象が現れてきた」と警告を指し示す。その見解を改訂して「省みれば、過去二十年間、子どもたちの遊び場、広場を奪って、大人は工場、住宅、駐車場などを造った。一方、学制の六・三・三制の風土、入試システムは、動きが止まり、子どもたちを密室に閉じこめて、一週間に二、三時間の体育時間では生物学的に見てもこんな現象の起るは当然だ」と考へられる。

本書は、大正期以来のプロレタリア文化運動に携わった人びと、あるいは文学運動の周辺にいた作家たち(収録作家数、合計一五五名)の昭和二十年までの書目集である。原則として明治期から昭和二十年までの全著作(個人の著・編・訳書二四二点、多数著者の全集・合巻九八点、但し詩集・歌集・句集の類は除く)を対象として編者らは当然のことのように述べているが、この事実がどれ程に著者に与えた影響を過大評価し、最小の努力で最大の効果を期待する誤った合理性を求めた「アマチ」をおかしたと分析得る。

この種の意向が「代理体験」にとどまるのは逆に「自己の意志で行動すること」即ち「随意運動」の意味と重要性が情熱的に説かれてい



「いま、新たな雑誌の時代」

現代および近未来の若者に向かって、スポーツの意義を強調する書である。文明の加速度的な進歩と反比例して、身体が虚弱化が一般化しつつある傾向に、二人の著者は心底から憂いをこめて、対策の必要を多面的に語りかけている。晩年の大島謙吉は「心のウツク心配」の根源として、「小・中・高の子どものために、何と、早期老化現象が現れてきた」と警告を指し示す。その見解を改訂して「省みれば、過去二十年間、子どもたちの遊び場、広場を奪って、大人は工場、住宅、駐車場などを造った。一方、学制の六・三・三制の風土、入試システムは、動きが止まり、子どもたちを密室に閉じこめて、一週間に二、三時間の体育時間では生物学的に見てもこんな現象の起るは当然だ」と考へられる。

本書は、大正期以来のプロレタリア文化運動に携わった人びと、あるいは文学運動の周辺にいた作家たち(収録作家数、合計一五五名)の昭和二十年までの書目集である。原則として明治期から昭和二十年までの全著作(個人の著・編・訳書二四二点、多数著者の全集・合巻九八点、但し詩集・歌集・句集の類は除く)を対象として編者らは当然のことのように述べているが、この事実がどれ程に著者に与えた影響を過大評価し、最小の努力で最大の効果を期待する誤った合理性を求めた「アマチ」をおかしたと分析得る。

本書は、大正期以来のプロレタリア文化運動に携わった人びと、あるいは文学運動の周辺にいた作家たち(収録作家数、合計一五五名)の昭和二十年までの書目集である。原則として明治期から昭和二十年までの全著作(個人の著・編・訳書二四二点、多数著者の全集・合巻九八点、但し詩集・歌集・句集の類は除く)を対象として編者らは当然のことのように述べているが、この事実がどれ程に著者に与えた影響を過大評価し、最小の努力で最大の効果を期待する誤った合理性を求めた「アマチ」をおかしたと分析得る。

本書は、大正期以来のプロレタリア文化運動に携わった人びと、あるいは文学運動の周辺にいた作家たち(収録作家数、合計一五五名)の昭和二十年までの書目集である。原則として明治期から昭和二十年までの全著作(個人の著・編・訳書二四二点、多数著者の全集・合巻九八点、但し詩集・歌集・句集の類は除く)を対象として編者らは当然のことのように述べているが、この事実がどれ程に著者に与えた影響を過大評価し、最小の努力で最大の効果を期待する誤った合理性を求めた「アマチ」をおかしたと分析得る。

本書は、大正期以来のプロレタリア文化運動に携わった人びと、あるいは文学運動の周辺にいた作家たち(収録作家数、合計一五五名)の昭和二十年までの書目集である。原則として明治期から昭和二十年までの全著作(個人の著・編・訳書二四二点、多数著者の全集・合巻九八点、但し詩集・歌集・句集の類は除く)を対象として編者らは当然のことのように述べているが、この事実がどれ程に著者に与えた影響を過大評価し、最小の努力で最大の効果を期待する誤った合理性を求めた「アマチ」をおかしたと分析得る。

本書は、大正期以来のプロレタリア文化運動に携わった人びと、あるいは文学運動の周辺にいた作家たち(収録作家数、合計一五五名)の昭和二十年までの書目集である。原則として明治期から昭和二十年までの全著作(個人の著・編・訳書二四二点、多数著者の全集・合巻九八点、但し詩集・歌集・句集の類は除く)を対象として編者らは当然のことのように述べているが、この事実がどれ程に著者に与えた影響を過大評価し、最小の努力で最大の効果を期待する誤った合理性を求めた「アマチ」をおかしたと分析得る。

本書は、大正期以来のプロレタリア文化運動に携わった人びと、あるいは文学運動の周辺にいた作家たち(収録作家数、合計一五五名)の昭和二十年までの書目集である。原則として明治期から昭和二十年までの全著作(個人の著・編・訳書二四二点、多数著者の全集・合巻九八点、但し詩集・歌集・句集の類は除く)を対象として編者らは当然のことのように述べているが、この事実がどれ程に著者に与えた影響を過大評価し、最小の努力で最大の効果を期待する誤った合理性を求めた「アマチ」をおかしたと分析得る。

大阪城ホールで記念式典

11月2日、盛大に



業や検討が進められている。記念式典は、来る十一月二日(日)大阪城ホールで、約七千名余りの関係者を招き盛大に挙行の予定で、式次第をはじめ、招待者

のひとりに、自然科学部門から、ノール物理学賞受賞者の江崎玲於奈博士がまず内定した。募金活動が始めてから既に二年余りが経過した。その間、在学生、父母、校友、企業等の関係各位、各方面からの格別な配慮により、目標額の達成もほぼめどがついた

のひとりに、自然科学部門から、ノール物理学賞受賞者の江崎玲於奈博士がまず内定した。募金活動が始めてから既に二年余りが経過した。その間、在学生、父母、校友、企業等の関係各位、各方面からの格別な配慮により、目標額の達成もほぼめどがついた

のひとりに、自然科学部門から、ノール物理学賞受賞者の江崎玲於奈博士がまず内定した。募金活動が始めてから既に二年余りが経過した。その間、在学生、父母、校友、企業等の関係各位、各方面からの格別な配慮により、目標額の達成もほぼめどがついた

のひとりに、自然科学部門から、ノール物理学賞受賞者の江崎玲於奈博士がまず内定した。募金活動が始めてから既に二年余りが経過した。その間、在学生、父母、校友、企業等の関係各位、各方面からの格別な配慮により、目標額の達成もほぼめどがついた

のひとりに、自然科学部門から、ノール物理学賞受賞者の江崎玲於奈博士がまず内定した。募金活動が始めてから既に二年余りが経過した。その間、在学生、父母、校友、企業等の関係各位、各方面からの格別な配慮により、目標額の達成もほぼめどがついた

のひとりに、自然科学部門から、ノール物理学賞受賞者の江崎玲於奈博士がまず内定した。募金活動が始めてから既に二年余りが経過した。その間、在学生、父母、校友、企業等の関係各位、各方面からの格別な配慮により、目標額の達成もほぼめどがついた

のひとりに、自然科学部門から、ノール物理学賞受賞者の江崎玲於奈博士がまず内定した。募金活動が始めてから既に二年余りが経過した。その間、在学生、父母、校友、企業等の関係各位、各方面からの格別な配慮により、目標額の達成もほぼめどがついた



編集後記

花はすでに散り、今や青葉若葉の季節。伸び盛りの春である。一方、学生諸君はどうか。新入生の皆さんはなんとかが病とやらには悩んでいないだろうか。今月号は、予算関係の記事が入って増ページ、盛りだくさんの内容となった。締切り日までの短期間に筆を飛ばして下さった方々に深謝! 尚、四月に委員の交替があり、田中茂和先生(商)に代わって、羽原敬一先生(理)が新しい委員になられた。(永沼・八亀)